

昭和三十四年二月二十三日
第三種郵便物認可
發行(毎月一回・十五日發行)

(通第一七八号)

慈光

第十六卷 第二号

目

「教行信証」信楽釈……………近角常観……………(1)

堂の鈴(十四)……………佐藤強三郎……………(11)

次

一道会の記……………榑原徳草……………(16)

法信技……………福田鉄雄……………(23)

「教行信証」

信樂釈

近角常観

近角常観

これにつき、昨年この求道会を企てた節は、なお故大草恵契師が存命して下され、報恩寺蔵、聖人御真筆の『御本書』を拝観するを得たも、全く同師のお力である。昨年浅草における『御本書』拝観の席には、病中ながら列席して下され、席上で御挨拶下されたる御言葉は、御同ように身にしみて今なお耳底に残つて居る次第であります。其の大草師が病中信仰に入られた時、私の話した事が矢張り丁度今の処である。

一日、私が大草師とお慈悲を話した時、同師の言わるるには「自分は病気で何時知れぬ身であるけれども、それでも今日明日とは思てやせぬぜ」と、言われた。これは如何なる病人でも、自分の危篤を今と申うて居る者は一人も無いのである。病氣になつても、誰も弥々死ぬるとは思うてやせぬのである。これは人間の横着な性分で、それ故健康の者が、まだ／＼と思つて居るのも、矢張りこれと同じである。人間は、どのような危篤に迫つてもまだ／＼と思つて居るものなのであります。

で、其時、大草師は誠に軽妙なたとえを言われた。

有るからと金使いをなし、まだ／＼寿命あるからと、一日一日突きやつて居る、その日暮しの余地は何処で無くなるのであるか。ここが実に肝腎であります。

斯く愚かなる日暮しをして居る中に、遂に堪えきれずして親の方が、此方に来て仕舞われた。して言わるるには「汝、何を愚図々々して居るか、我は久しく汝を待つた汝は何故帰り来らぬか。此の金を使つて仕舞うたら帰ろうなどは、何言うてるのであるか。ちつとはそのため夜の目も合わず心配して居る親の身にもなつてくれ。親は汝がもう帰るか／＼と、毎夜々々汝一人を一子の如く待ち兼ね、待ちわびて居るのであるぞ。それに親の心も知らず、まあ当分はこうしてやれようなどは、何言うてるのであるか。早く自分の心を了解して呉れ、早く自分の思いを受取つてくれ」

と、直き／＼私に迫つて下されたが、即ち如来の廻向心なのであります。

然るにそれを或人は、此方より頂く信心ならば、まだ得られようもあるうけれども、向うより下さる如来廻向の信心故、時節が来るまでは、手を空しくして待つよりしようがないと歎かれる。

否、如来の方は、此方よりそう言う風に言うもの故、弥待ちかね、たまらなく

「丁度道楽息子が、何れ親の処に帰らんならんと思いがらも、まだ残りの金があるから、当分費つて居れと言ふのと同じである」

と。これは健康の者でも御信心を得なくともよいと思つて居る者一人もない。而もまあ病氣でもしたらと突きやつて居るのである。況んや病氣になつた者は、何れ信仰を頂かんならん、是非信心が欲しいと思ひながらも、而も今と詰めて思わぬ。弥々駄目と詰つたら、その時は頂けようと、姑息に一日一日と押しやつて居るのである。その様は恰も道楽息子が、此のように金使いしては親に落まぬと心に思ひながらも、まあこの金の残つて居る間は使つて居て、弥々金が無くなり、生命が終るとなつたら、その時は親の処に行こうと押しやつて居る日暮しであります。

さりながら、人間は、弥々今死が迫つて来たと思つものならなければ、死ぬまで人間はそんな事思ふものは一人も無い。

すれば何処で驚きを立てて頂けるのであるか。愈々金がなくなりてから頂けるのでは無い。すれば、まだ／＼金が

「それ故、これ程までに此方より言うのに、これ程待ちかぬる親の心を、どうか健康なうちに頂いて呉れ」

と。言わるるのである。親のお心としては、金が無くなるまで放つて置いては親心として案ぜらるる。

「どうか金の無くならぬうちに今の中に頂いて呉れ」

と、であります。斯くこれ程までの絶大なる親切をもち、親の方より、面のあたり迫られた時は、如何に横着なる我々も、それ程までにこの身一人の行く末を思召しての親心かと、頂かずに居る余地が無くなる、

「あゝ長々待ちかねさせ奉りし事の申訳なさ」

と、平日の時、善知識の言葉の下に、斯く一念有難やと、頂かれた処が、真実の信心である。即ち頂けるは、かくまでに遣る瀬なく迫りて下さる如来廻向によりて初めて頂かれるのであります。

そこでその趣きをその時、私は大草師にお話して、師も大いに喜んで下されたのであります。けれども、併しその時はどうもまだ充分に適切に通じかぬるよりの感じがあつた。

でこの時、私の思つたは、それは多年に渡る大草師と私との間柄であります。私は学校を出て社会に立つに至るまで、一方ならぬ同師の御世話を蒙つた。而して久しき間宗教上の仕事も共に一緒に働かせて貰つて居つたのである。

で、平日より信仰上の事も共に話して居つたのでありますけれども、何分立場が信仰で無いもの故、どうも私の考えを充分理解して貰えぬ。故に近來私よりは余り話さずに居たのである。然るに師は遂に病氣になられた。でここぞ、私より飛んで行き「どうかお慈悲を頂いて下され」と出なければならぬ処なのである。しかるにそれを實際私は遣りて居らぬ。それは御病氣の折柄人情として言いづらきがつと、又一つはそれ故、平日あれ程話したのであるけれども、師は遂に聞かれなかつた。故に今話しても又駄目ならんと考へがあつたからであります。

○ 処が、其日、辭して帰ろうとするに当り、師の御夫人より私は頼まれた。其御夫人も、そのしばらく前、師と同時に病床にあり、病中信仰に入られた方なのであります。その夫人が私に言われるには『主人もこの頃大分お慈悲を求め、頻りに骨折りに居る様子である。けれどもまだどうも今すこしの処が安心がつかぬ模様である。ついでには病床始終あなたの本を読み、あなたのことを褒めて居るのであるから、どうかあなたから真実の安心を与えて頂きたらよからうと思う。実は此頃大分病勢も悪しく、此の間も、』
「自分の生命も來年御遠忌まで生き長らえれば結構であるから、私も「來年御遠忌まで生き長らえれば結構である

限り永却の別れとなるわけにて、実に残念の至りである。聖覚法印の『唯信鈔』の仰せにも

「今生夢の中のちぎりをしるべとして、來世さとりのおまへの縁を結ばんとす。我おくれなば人に導かれん。我先き立たば人を導かん。生々じやうじやうに善友ぜんゆうとなりて仏道を修せしめ、世々に知識となりて、ともに迷執めいしゆをたたん。」とありて、前生より定まれる約束とあれば、いつ何時この世のお別れになるかも知れぬ。去りながら、設たい何時生死、所を異にするも、御信心さへ頂いて置いて下されば、一緒にあるも矢張り同じである。斯く申すも、私が現にこの待ちかね給うお慈悲一つで安心させて貰うて居る事故、あなたも同様頂きて欲しいと思ふのであります。御同様にこのお慈悲一つに安心したる上ならば、何時生死所を異にするも、今の聖覚法印の言葉通り「我おくれなば人に導かれん。我先き立たば人を導かん」である。あなたも其上から此の世の寿命終りたら、極樂に行かれ、私を待ち受けて居て下さい。併しながら、斯く言う私が、今晚にもどうなるか計られぬのである。そのときは私が先き参りて、あなたをお待ち受けするばかりである。故にどうかあなたも、この広大な慈悲をお頂き下さい。私が今ある心中を残らず打出せば、先ずこの通りであります。」
と語つた。すると大草師もこの時今までとは様子が変り

も、御遠忌まで持たないかも知れぬ。待たない時はどうなさる」と話して居た程である。そういう次第故、今度来た時は、是非思いきつて話して下さい」と実に手を合下さぬばかりに切實なる御依頼を受けたのであります。

私はこれを聞くなり、御夫人でさえ既に人生のことは思ひ切りて、これ程までに信心上の事を思はるる。しかるに第一に言うべき私が今まで言わずに居たは実に申訳が無いと、其日は念仏称え／＼帰宅しました。そして翌朝早速又飛んで行つたのであります。

して師に向い申したには、
『実に私は長らく済まなかつた。実は私はあなたに多年非常な御世話になり、若しあなたが長く存命して信仰上より法のためにお働き下さるならば、及ばずながら自分も一緒にと今日まで思うて居つた事である。併しながら、今はあなたは御病氣で、今晚にも知れぬ身体を抱えておいでになるとすると、もう私の取り柄は、此の広大のお慈悲一つをお知らせする外にない。然るに今日までようこれを言わなかつたは、実に申訳なく、済まぬ事でありませう。就きてはあなたは「まだ今明日とは思われぬ」と言われるも、今明日と思われぬと言はるる処が実に大騒動の点である。若しあなたが大悲の親様が待ち受けて下さるという事を、今生こんじやうにてたしかに頂いといひ下さらずば、弥々いよいよの時來るときは、これ

『あゝ君よく言うて呉れた。実に有難い。能く分つた。今迄信心決定とは、何かとらえて決定と思つて居たもの故、いつ決定の時が来るかと思つて居たに、実に有難い』と、卓を叩いて喜んで下された。それからはもう、何度お遇いしても、分らぬとは言われなかつた。併し師は、その後も常に人に対し『俺はまだ信心など頂いて居ぬぞ』と言われたというは、これは師が法の事を軽々しく言わず、非常に大切にされる人であつたからであります。

さて以上は故大草師が喜ばれた道行きを話したのであります。が、実に斯くの如く、信心は此方より仏に向い「どうかお慈悲を仰ぎたい、信心を頂きたい、決定の時節は何時あるか」

では、どうしても得られぬのである。で先き程も申す如く或人は、私がこの如来御廻向の趣きを話したら、
「自分より頂くなればまだ頂きようもあるうけれど、向うより御廻向ではいつ下される事か」
と泣いて歎かれた方があつた。それは廻向という事を、何か気まぎれに仏が物下される事のように思つて居るからである。

処が此方がそんな事思つて居る奴故、仏の御心は弥々ひと通りで無い。今気がつくか／＼と待ち兼ねて、在るにも

在られず、延び上つて待つて下さるお姿が、立振即行の仏の御立姿である。其の遣る瀨なきお心で向うて下さるもの故、遂に此方の目が醒め、頂ける処が、如来廻向という事なのであります。

さてこれより次に移ります。

『是を以て、本願の欲生心成就の文、経に言わく。至心に廻向したまへり。彼の国に生れんと願すれば、即ち往生を得、不退転に任せむと。唯五逆と誹謗正法とを除くと。已上。』

又言わく。所有の善根廻向したまえるを愛樂して、無量寿国に生ぜん願すれば、願にしたがつて皆生ぜしめ、不退転乃至無上正等菩提を得む。五無間、誹謗正法および謗聖者を除くと。已上。』

こはいつもの如く、初めは『大経』、次ぎは『大経』の異訳『如来会』の中より、本願を引用して、如来の本願は大悲廻向なる趣きをお知らせ下されたのである。而してこくなる文はかねて信樂釈にて申した願成就の御文の前半は、信樂釈に入れ、後半をここにお出し下されたのである。これから頂いても欲生の廻向心の体、即ち信樂のお慈悲に外ならぬ味いが、よく頂けるのであります。

次は『浄土論』の御文をお引きなされて、

『浄土論に曰く。いかに廻向したまえる。一切苦悩の衆生をすてずして、心につねに作願すらく。廻向を首として大慈悲を成就することを得たまえるがゆえにとのたまへり。廻向に二種の相あり、一には往相、二には還相なり。』

往相というは、おのれが功德をもて一切衆生に廻向したまいて、作願してともに、かの阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめ給うなり。

還相というは、かの土に生じ終りて、奢摩他、毘婆舍那、方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、ともに仏道にむかえしめたまうなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがために。この故に廻向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまへり。『已上。』こは「大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまへり」までが、天親菩薩の『浄土論』の御文にして、以下はその文意を明らかにするために、曇鸞大師の『論註』の御文をお挙げ下されたのであります。

而して御覽の如くこでも親鸞聖人は「回向する」の文字を「廻向したまえる」と読ませ給いてある。これは一体願力という力がついていない。こは大に気をつけねばならぬ処であります。

ところで御文に就いて申せば『如何が廻向したまえる』……仏の廻向はどう廻向して下されたのかと言うに「一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまへり」……こは『和讃』の上には

如来の作願をたすぬれば 苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまいて、 大悲心をば成就せり。
「その仏の広大なる御廻向のもとを尋ぬれば、一切苦悩の衆生が哀れ、見捨てられぬとの広大のお心がもとになり、それより常に願を発し、我が心が衆生に届くよう、衆生に通じるようとの、廻向を先きとして、あなたの大慈悲を御成就下された」との意味であります。

而してこれに曇鸞大師は註釈を加えられて、その如来廻向に二種ありて、即ち一には往相、二つには還相である。往相の廻向と言うは、阿弥陀仏が長々御苦勞下されたあなたの一切の功德を我々衆生に廻向し給いて、彼の仏の安樂浄土に生れさせて下さるが往相の廻向である。又還相の廻向とは、その往相の廻向で安樂国土に往生させて頂いた上は、仏のお恵で、奢摩他、毘婆舍那、方便力を成就することを得て、——奢摩多は定であり、毘婆舍那は智慧であ

から言うと『浄土論』の上では廻向の文字を、如来廻向には読めぬ。むしろ衆生より廻向するの意味にとるのが当り前の読み方である。然るに他力という上より言う時は、他力とは、他なる仏より遣る瀨なきお力を加えて下さるといふ事にて、既に一度申せし如く、曇鸞大師の『論註』の上には「仏より言う時は利他である、他を利益するのである」といふ、所謂他利他の御教化なるものがある。親鸞聖人は深くこのお示しに着眼あらせられて、即ち『証卷』でお喜びの御言葉には、

『爾れば大聖の真言、誠に知んぬ。大涅槃を証すること、は願力の廻向によりてなり。還相の利益は利他の正意を願わす。是れを以て論主は、廣大無碍の一心を宣布して、普偏く雜染堪忍の群萌を開化し、宗師は大悲往還の廻向を顕示して、ねんごろに他利他の深義を弘宣したえり。仰いで奉持すべし、特に頂戴すべし矣。』

その御教化からいうと、何うしても茲の廻向は、如来より作願して下さる願力廻向で無ければならぬのである。故に聖人はこれを如来廻向に読み、往相還相、皆仏よりの願力廻向であると言われたが、実にこの御文より出て来るのである。浄土真宗の骨目は実にこれではなくてはならぬのであります。

爾るに近頃の人のいう廻向は、大低唯廻向だけであつて

る。その定と智慧を成就し、自由に衆生済度の方便力を得て、再び生死の稠密なる林に帰り、一切衆生を教化して其の仏土に迎えよとの働きを与えて下さるが還相の廻向である。即ち一旦浄土に往生させて頂きた上は、今度はこの煩惱の巷に再び姿を現わし、此の仏の広大なる仰せに聞けと、一切衆生を導く事の出来る身にして頂くとであります。

で、これは他力の上より言くと、我々一家なり一門の間に於いて、或は親と子となり、兄弟となり、夫婦となる。これ皆信心の上からはこの還相廻向の働きで、結局先きなるものは後を導き、後なる者は先きに導かるゝ姿なることを頂か無くてはならぬのである。

現に此の会の開会に当り、我々中村氏の往生に遇うたにつきても、深くこれを感じる事でありませぬ。中村氏は多年学舎の同朋にお目にかゝるを榮しみにして居て下されたのであるが、この度不思議にも本会の開会と共に、遺骸となりて学舎に運ばるるという事になつたのである。これ実に有縁の我々に人生の無常を示し、共に斯く浄土に参らせて貰うのじやとお知らせ下されたお姿であると頂かねばならぬのであります。

でかく我々を浄土に呼びよせて下さる往相の御廻向も、

報の莊嚴のことである。

又莊嚴仏功德成就と莊嚴菩薩功德成就とは、無量の仏、無量の菩薩、功德を尽くして莊嚴されてある。所謂正法の莊嚴の事である。

斯く三種の莊嚴の功德成就してあるのは何か。畢竟私が我々衆生を助けたいとの浄入願心から御成就下されたのである。衆生が哀れだ、可哀相だとの遺る瀬なき親心から莊嚴して下されたのであると、応に知れとの『浄土論』の御教化である。

而してその応に知れとは、外の事を知れとではない。その浄土願心より御成就下されたとは、即ち阿弥陀仏の四十八願の我々衆生を助けたいとの清らかなる親心より御成就下されたのにて、即ち極樂の諸種莊嚴は、此の広大なる本願の親心より現われ、我々のため待ち受けて居て下さる有様である。斯く清らかなる親心の因より現われし莊嚴なれば『因浄なるが故に果浄なり』その結果としても、実に斯く清浄なる浄土の諸種莊嚴が現われ来りたのである。この外に他の因が有つたり、又は何の因もなくして偶然に出来たのでは無いと、応に知れとの御言葉であると、これは曇鸞大師の『論註』の御文を茲にお引き下されたのであります。ここは我々動もすると、浄土なる仏の世界が、我々と何の関係なしに偶然あると思ふ故、極樂があるや否や、な

又其の上から衆生化度のため人生に現わるる還相の御廻向も、要するは我々衆生を救い取つて下さるための大悲ならざるはない。故に次に

『若しは往、若しは還、皆衆生を抜いて生死悔を渡せんが為にしたまへり。是の故に廻向を首として大悲心を成就することを得たまへるが故にと云へり』

次に、

『又云わく。浄入願心というは、論に曰く。又さきに觀祭莊嚴仏土功德成就と、莊嚴仏功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とをときつ、この三種の成就は、願心の莊嚴したまへるなりと知るべしといえり。知るべしと云うは、この三種の莊嚴成就は、本と四十八願等の清浄の願心の莊嚴したまへるところなるに由りて、因浄なるが故に果浄なり。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。已上。』

こは上述の広大なる往還二種廻向にて我々を浄土に迎え取りて下さる。その我々の参らせて貰う浄土には、種々の莊嚴が尽くされてある。

先ず莊嚴仏土功德成就というは、極樂の国土が七宝の宝池、七宝の宝林等あらゆる功德莊嚴されてある、所謂、依

どの不審が起るのでありますけれども、極樂は斯く大悲の遺る瀬なき御心より成就し、我々を待ち受けて、下さる浄土である。故に有りや否やで考へては分らぬも、極樂は斯く、衣服や、喰べ物が親の慈愛から現われ出する如く、我々を助けたいの大悲の親心の因より、成就せられたのである。何も因無くして偶然現われ出たので無い。而して往還二種廻向の御恵みで、其処へ参らせ下さるのだ、との御教化であります。

又、次に

『又論に曰く。』

出第五門というは、大悲心をもて一切苦惱の衆生を觀察して、応化の身をせしめて、生死の蘭、煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯し、教化地にいたる。本願力廻向をもつての故に。これを出の第五門となつくとたまへり。已上』

これは同じく『浄土論』の中に、広大なる如来廻向の御恵みにより、我々が浄土に参らせて頂く有様を、五功德門ということによりて説かせられてある。

五功德門とは、一に近門、二に大会衆門、三に宅門、四に屋門、五に蘭林遊戯地門の五門で、然して今は、その

第五の蘭林遊戯地門につきての仰せなのであります。

先ずこの五門は喩えて言えば、我々が故郷に帰る時の有様と丁度同様で、先ず段々極樂に近づき、遙に極樂の光景が目に見えて来た処が近門である。而して弥々門に至れば、沢山の聖衆がお出迎いで下されて、此等の聖衆にお目にかかり、挨拶する処が次ぎの大会衆門である。而してそれより弥々阿弥陀仏の宅に入り、弥々お浄土の奥座敷迄通ると、親様にお目にかかった処が、次の宅門、屋門となるのである。依て斯く弥々奥迄通り、親様にお目にかかつて無量の持てなしを頂戴すれば、このたびは充分満足して、裏門より出て花園を散歩する格で、衆生落度のために、生死の蘭、煩惱の林の中に再び出かける事となる。これがこの出の第五門の蘭林遊戯地門となるのであります。

只今の御文には『出の第五門とは、大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の蘭、煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯し教化地に至る』——即ち斯く弥々極樂に到り諸の法味樂を受け、仏境界の奥の奥まで極めさせて貰うて見れば——『正信偈』のお示しも、ここをば

蓮華蔵世界に至ることを得れば、

即ち真如法性の身を証せしむ。

煩惱の林に遊んで神通を現じ、

来現にてまします。我れこの二菩薩の引導により、弥陀の本願を弘むるにありとは、聖人の常のお喜びであつたのである。

又御存知の如く『御伝鈔』の中には、「一生の間能く莊嚴して、臨終まで引導して極樂に生ぜしめん」との観世音菩薩の御告命もあるであります。すれば先き程申した極樂の三種莊嚴の有様は、必ずしも、未来極樂に行きての事ばかりで無い。我々がこの人生に於いて、この広大な慈悲を頂きて、日々よきにつけ、あしきにつけ、お慈悲一つを喜ばせて貰う。この人生日常生活の上に於いても、信心の上からは、その味いを喜ばせて頂く事が出来るのである。我々がこの広大な慈悲一つのお力で、此の人生善悪の間に処し、やつて行くことの出来るのは、全くこの広大な如来廻向の御導きの下に日暮しさせて頂くからである。故に要する所、唯弥陀一仏の大悲を信じ、人生の順につけ、逆につけ、遣る瀬なき思召し一つを頂きて暮すが、何より用要であります。

なお序に申すのでありますが、今言う広大のお姿が、直接人生上に手引きして下ると言う事を、これを我々の罪悪深重という事と離れて言う、思わざる邪見に陥入り、飛んでも無い弊害を持ち来たすのである。こは余程注意しなければならぬのであります。我々は言う迄もなく、何処ま

生死を蘭に入つて応化を示すといえり。

と仰せられ、この度は、それより裏門を出て見ると、種々なる花園や林がある。その中を散歩すると同じ有様で、即ち今自分が広大なるお恵みで、本覚明了の境界を悟らせて貰つて見れば、このたびはひるがえつて今までの自分と同じく、多くの迷うて居る人達が可哀相で仕ようがない。そこで、今度は、観音大士が三十三身を現じて、諸の衆生をお救い下さると同じように、自分も再び生死の蘭、煩惱の林の中に姿を現じ、今度は仏境界なる神通力を用いて、自由に人生有縁の人々を度する働きをさせて頂く事となる。

而して

『本願力の廻向を以ての故に、是を出の第五門と名けたまへり』

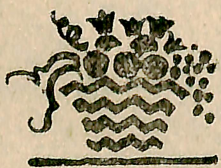
この蘭林遊戯の働きをさせて下さる事も、全く本願力の廻向によるのである。これが還相廻向のお哀れみであるとの御文であります。

で親鸞聖人は、常に此の人身において、直接この大悲の御手引を蒙る事を深くお喜びなされた。即ち法然聖人は勢至菩薩の化身として、この親鸞に直接他力信心をお知らせされたのである。又この浄土真宗の家庭本位の宗風の御手引きをなし下されたる聖徳太子は、実にこの観音菩薩の

でも罪悪深重の浅間しき私である。而してその私を導き誘いて、其者を浄土に引き込むために現われて下さる手引きである。即ち言いかえると、信心の上からは、我々の心に絶対の罪悪感が頭われるから、従つて人生の上に救いの御手導きが弥々明らかに味わせて頂く事が出来るようになるのである。

処がこの罪悪感無しに、唯人生の上にお手引きを言う時は、仕舞には人生のこの世がすぐ浄土だというようになり、「親鸞聖人など此の世から、さながら菩薩の境界を味つて居られた。我々も信の上からその生活が出来るのである」などとなると大変な間違いに陥入るのである。斯く自分の罪業深重を忘れてこれを言う、折角聖人のお知らせ下された『浄土論』の還相廻向の味が、浮いて仕舞うのであります。

第二回夏季求道会、第六日第二席。



佐藤強三郎

病青年と語る (二)

その後、信哉は度々雄三を慰問した。

雄三「生きたくとも生きられない。これも自分の宿業とあれば仕方がない。然し、今死ぬのが残念でたまりません。

いよいよ絶望となれば、達者な人が羨ましい。呪わしい無やみに反抗的になつて、世間にあたり散らして見たい氣になる。こんなひどい根性です、恥ずかしい、淺聞しい。自分が長患いをしていけば、家は困るだろう。母は氣の毒です。私は人に迷惑ばかりかけて生きています、ほんとに無意味です。無駄な者は早く死んだ方がよからうと思うが、それも出来ない。氣が狂いそうです。恥ずかしい」

信哉「……悪い心がやまぬ。この苦しみは他人に打開けられない。そして氣狂いになるかも知れない。こんなになつてまでも生きていてはなお恥ずかしい。……ところがこんな心根であることをかねて知りぬいて、それを哀れんでどこまでも呆れないというお慈悲があるのです」

××× ××× ×××

信哉「私共、金や、人間の力で、思いのままに出来るものならば、救いはいらぬのです。憐れんで貰う必要はないのです。どうする方法もないから苦しみは止まぬのです。その煩悶多き自分を、罪悪深重の自分を憐れみ、それが止まぬのを氣の毒に思つて、どこまでも呆れない、見捨てない、たすけとげなければ安んじて居れない、というお慈悲がましますのです」

××× ××× ×××

雄三は後で考えた。

自分は初めから、病氣が治りたいことばかり明け暮れ望んでいた。病氣を治してくれることが、たすけてくれることとばかり思い込んでいた。よく考えて見れば、病氣は、一時治つても、又後で病氣にかかる、そして遂には病氣で死ぬことにならぬ、寿命が終る。そうすれば、最後には病氣で……そうだ。病氣そのものを苦しめる心を解決しなければ

本当に死を解決とはいわれぬわけだ……何処へ行つても不死の靈薬はないだろう。

或宗教では、その宗教に入れば病氣が治るから信心せよというとか。

然し病氣を絶対に治せる宗教はないだろう。

死がいよいよ迫つて来れば、金も物も人の力も、もう何の役にも立たぬ。その役に立たぬものを頼んだとて、今更なんとしよう。只残るものは、苦しむ心のみである。自分はいからどこへ行くのか。悪い心のもは、悪い所へ行く外ないだろう。その仕様の無い者をあわれんで、どこまでもあきれない、見捨てないという無限の温い心こそ、死ぬ自分にとつてありがたい、唯一の贈物でなくて何であらう。自分は苦悩のあまり発狂するかも知れぬと時々思つた。これからもどうなるかわからない。そんなことを苦しんでいるよりは、一層自殺した方がよい。これだけが此期に及んで自分にも出来る唯一の善い事であるときえ思つた。然し………自殺しても解決はない………生もならず、死もならぬ………

こんな仕様の無い愚か者を可哀そうに思い、どこまでも呆れぬ、見捨てぬという廣大のお慈悲は、たとい世界中の者が笑つても、その無碍の御心のみは決して笑わず、あざけらず、共に泣き、共に悲しんで、どこまでもあわれんで

下さるに違いない。極重悪人をどこまでも呆れない、この無碍のお慈悲一つあれば、これ一つあれば、生きようが、死のうが、狂おうが、それ一つ聞けば満足である。
 〓ああ、仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとしられていよいよたのもしくおぼゆるなり〓とはこのことか。

××× ××× ×××

苦しい心をたすけるものは、慈悲の心のみである。心をたすけるものは心のみである。金でも物でも人の力でも、人の心をたすけることが出来ないことを知つた。この苦悩の心を救う、無碍のお慈悲をきけば、いかに苦悩多からんとも、罪深からんとも、死ねばただちに、そのお慈悲の許へ飛んで行かれるに定まつている。

ありがたいことに、自分の様な極重悪人であることも、

孤独なことも、無常であることも、十分知り抜いてその上で、そんな仕様の無い者を憐れんで悪く思わず、呆れず、たすけずんばおかぬと待つていて下さる不思議なお心を聞いたのだ。それをきけば、どんな境遇であろうと、どんな所にしよう、命終れば、何の遠慮もためらいもなく、そのお慈悲の許へ何日でも直ぐ飛んで帰ることが出来る。

そうと心がきまれば、強いて死を急ぐ必要もない。生き

ていても、死んでも同じことだ。どこにいても同じことだ。ただ生死を定業にまかせて、仏を仰いで行こう……と、雄三は色々の思いにふけつた。

雄三は、人をはなれて、仏に帰した。そして、一人でお経を榮しげに拝読した。

ことに歎異抄の第九章をくりかえし拝読しては、
△仏かねてしろしめしてと、仰せの如く、自分が煩惱具足であることを、前から知つていられて、それを哀れんでいて下さったのであつたのか。こんな意外なこと、不思議なことがあるうとは知らなかつた。
ああ、ちからなくしておわるときにかの土へはまいるべきなり、と、あるV

更に歎異抄の第一章の、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり云々」

の言葉もそのままなずかされる。更に歎異抄の第二章「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたね

願さまをたぐるほどの悪なきがゆえに、……であるVと感した。また、

生死の苦海ほとりなし　ひさしくしずめる我等をば
弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける
と拝読して、雄三は思わず涙ぐんだ。

信哉は度々雄三を慰問した。病人の様子を見て思つた。
△手塚雄三君は、いよいよ生きられぬと自覚して居ながらあのように無限の大悲を仰ぎ、寝たきりで、生きるも死ぬるも業報にさしまかせ、本願をたのみまいらせて、死後になお希望を失わず感謝している、安心している。これこそ無言の大説教でなくて何であるう。これぞ人生最後の解決は絶対の慈悲一つであることを、身をもつて実証して見せている尊い姿であるVと。

ある日、誰も居ない時に語り出した。
雄三「死ぬ時には、安らかに死にたい」

信哉「それはそうです。もつとものことです。然し業報とあれば、どんな死に方をするかも知れません。或はよるこんで、念仏して往生するかも知れません。あるいはまた、彼奴は憎い奴だ、生かしては置けぬ奴だ、と呪いつつ死ぬかも知れぬ。または自分が一代の間口外すまいと

にてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん、総してもて存知せざるなり。

たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行をばげみて仏になるべかりけり身が、念仏をもうして地獄におちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

雄三はまた思いにふけつた。

△自分は煩惱の末、氣狂いになるかも知れぬと時々思つた。その氣狂いを真にあわれんで、どこまでも呆れないという真実をきけば、氣狂いで生きていようが、死のうが、どうなるうが、心配はいらぬ。

願力無窮にましますば　罪業深重もおもからず
仏智無辺にましますば　散乱放逸もすてられず

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり　罪障重しとなげかざれ

この無限の慈悲をたれて下さる願船に乗托して、よきことも、悪しきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願を仰いで行こう。この無限の慈悲を垂れて下さるお方が一人あれば、一人あればそれで満足である。そうだ、弥陀の本

心に誓つたことを、熱病のためにうわごと言うかも知れぬ。あの人が、あんなことを、と、人を驚かすような言動をするかも知れぬ。死ぬるまで極重悪人です。何が出てくるかわかりません。……

又世には、念仏に心がけて、熱心に法をきき、一時は解つたような氣持で喜んでいて、その人が、その後不安になつてきて、殊に病氣になつてからは、真劍の念仏が出ない、どうしても本當のありがたい念仏が出ぬ。ますます不安になり、苦悶しながら、遂に亡くなつた人もあるう。又病氣が重くなつて、口がきけなくなつた。その間に、突然何かの因縁で、フト、不思議な本願に気がついた。そこで心の中で念仏したが、口が利かず、口を動かすが人には通じない。そのまま心の中よろこびを何人にも伝えることが出来ずに、一生を終つて行つた人もあるでしょう。……」

信哉「御和讃に
定散自力の称名は　果遂のちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に　真如の門に転入する。
念仏している人は、如来の果遂の大願業力により、何時何処で真如の門に転入させられて安心するかわかりません。それはただ仏のみ知りたまいとこころです。念仏

は、信者と仏様との交流です。世界何十億の人が知ろう
が知るまいが、ほめようが、けなそうが、信心には障り
がないのです。信心には変りがないのです。」

××× ××× ×××

信哉「善きことも悪しきことも、仏はすべて御存じです。
人にかくせても、仏様にはかくせません。御和讃に、

仏法力の不思議には 諸邪業繫さわらねば
弥陀の本弘誓願を 増上縁となつてたり。

増上縁とは、よろずの善にまされる善なり、という聖人
の御解釈であります……。

又、正信偈には

一生悪を造れども弘誓にもう値いたてまつれば
安養界に至つて妙果を証す……と。

往生は、弥陀にはからわれまいらせてすることですから
わがはからいではありません。わるからんにつけてもい
よいよ願力を仰ぎまいらせてまいりましょう」

雄三はあとで、和讃をくり読みしながら

○無碍光の利益より 威徳広大の信をえて

必ず煩惱の氷とけ すなわち菩提の水となる

○極悪深重の衆生は 他の方便さらになし

ひとえに弥陀を称してぞ 浄土にうまるとのべ給う

の二首にいたつて、思わず感涙にむせんだ。

××× ××× ×××

信哉が見舞つたある日。突然雄三は居すまいを正して問
いだした。

雄三「たすかる……とは本願を信することでしょうか」

信哉「そうです。単刀直入、まことに有難い解釈ですね。
たすけるとは、罪を覚悟させて、自然に、懺悔させるこ
とである。

たとえば、死刑に決つた者が教を聞いて、心から自分の
行動を反省し、△そうだ、自分の犯した罪はたしかに死
刑に相当する。自分を死刑にしなかつたなら、世の中に
平和が保たれないであろう。死刑は当然のことである▽
と心服して、死刑の執行をうける心持に転じさせるこ
と、これが救ける、というものである」

××× ××× ×××

信哉は雄三を慰問して帰宅し、思わず仏前にお参りして
お聖経を拝読した。

愚禿抄は建長七年乙卯八月廿七日、聖人八十三歳の書で
ありますが、その上巻に

「真実淨信は内因なり。撰取不捨は外縁なり。

本願を信受するは前念命終なり。即ち正定聚の
数に入る」

とあります。本願を信ずるとは、正定聚の数に在ること
で、すなわち、救かる、とは、本願を信ずることである、
と拝読しました。

××× ××× ×××

ある日、信哉が訪ねた時、雄三はシンミリ落着いて問い
出した。

雄三「お釈迦様がおなくなりになつてから、二千五百余年。

又、親鸞聖人から七百余年と大分長いようですが、永劫

一 道 会 の 記

例年の如く年に一度の一道会は今年は十月二十七日に催
おされた。池山先生御往生の後もう第二十六回目の一道会
である。今年も昨年のように二日前から愛媛大学仏教青年
会の学生達がやつてくる、男女学生十七名と先輩卒業生二
三名である、松本先輩教授は交渉のため十日程前に富山大
学での宗教学会参加の精路立寄つて下さる。三日間在泊中
毎朝六時より三十分本堂で参禅する、私が警策をもつて廻
る、睡間の本堂が次第に朝の霧に明けそめるまで坐る、前
日から来ている浜松の旧友鈴木喬平兄が睡間の堂前に参詣

榊 原 徳 草

にくる、霧の中へ消える。堂内では女子学生も坐つている。
早くから坐つている者は一時間位になる学生もある。

学生のこうした参禅から一道会への盛り上りはどうなつ
ていくのだろうかと思う、どうなつてゆくのだろう、青春
の淡い感情だけに終るのか、これをきつかけとして深く如
来の恩徳に身がしみる日があるのだろうか、私は黙々と坐
して学生を半眼に眺め乍ら思慮往来頻りであつた。

松本先生は当日の朝の十時頃まで、どうしたら念仏の
法が若い学生達に通ずるかについて私をつかまえて話し込

と言つて信哉をかえりみ、ニコツとした。
信哉は「南無阿弥陀仏」としずかに頭を下げた。

雄三はその後数日経つて、遂に若い身で息を引きとつた。
一つづくー

んで離さない、去年も今年も、富山からの帰りの時もある、心を碎く先生の苦悶ともいふべき、ひたむきの熱情には参つてしまふ。

参集の人々五十数名か、今年は知らぬ方々が大分見える。白井先生はすぐそこから、名古屋からは先師の御長男池山寿夫様と花田先生御夫妻、岐阜から渡辺先輩、四国から初めての合田様、その他京都から向島、川畑、東、信国、西元諸先輩教授の方々や例年の信友、親鸞会の懐かしい人々。一道会は池山先師会下に参じた人々のみでなく、近角常観、常音両師並びに足利浄円師の慈斧をうけた人々が渾然として一堂に会する法筵となつてゐる。まことに末代の慶事であり肅然とせざるを得ない無碍の一道会である。

午後一時例によつて阿弥陀経と掛和讃をもつて読経を終わり歎異抄第十章まで奉読する。私はこゝで今年こそスルツと拝読してあとの大事な時間を少しでも長くしようと坐るのだが、「……幸いに有縁の智識によらずんば……」の段になると胸がこみあげて涙と念仏になつてしまふ。一年間溜まつたあれやこれやのことがどうしても先師聖人の前に堤を切つて流れ込んでしまふ。弱い、もろい悪い性格、乱れに乱れる心が、一道会の準備でいよ／＼惑乱してどうにもならぬ、「しかるに仏かねて……」「煩惱具足の凡夫

を定められておられる。聖人はなぜ他の大乘經典を「真実の教」としてあげられないのであろうか、これが従来私の心の中の問題となつておりました。大乘經典は仏の境界を説いている、例えば涅槃經には「一子地」を説く、仏は三界の衆生を「一子地」として感ぜずにはおられない、迷いの衆生を救わずにはおられない、そこで、あらゆる衆生をわがひとり子として感じて救済せんとしておられる。島地大等先生は大乘經典を読まれる時、經典の中で仏が「衆生」と仰せになつた所は「私」と読んだ、と私に教えられた。仏の証りの境界は私を呼ぶ言葉である。私はそれを一子地で感ずるのであります。

聖人はなぜ大無量壽經のみを真実の教と言われるのでありましようか、これが私には問題となつていたので、**真実**ということ、**真心**一つということ、これは**真実の境界**一つに私をとりいれてしまわないと、それは**真実**でない。迷い狂う私を、**真実の境界**に扱え取り容れてしまふ、如来の**真実**とはこれである。この如来の**真実**が、どうして私に入つて下さるか、それを大無量壽經で説いて下さる。他の大乘經典では例えば涅槃經のように「一子地」に住している。如来が説かれてゐるがそれは如来の住している境界を説いてゐるのであります。この如来の**真実**がどうして私に入つて下さるかを説いて下さるのが大無量壽經であ

と仰せられたることなれば」「況んや悪人をや」、聖人直々の御声が池山先師のお姿から私にしみこんでくる。池山先師の「吾れならぬきよらのわれのわれにありて穢悪のわれをわれにしらしむ」の一句がこの時ほど味わえることはない。私は遂、私事を誌してしまつたが、先師と歎異抄というこの二にして一の前に引き出されると私は感激して如来聖人と十方三世の先聖に謝せずにはいられない。

さて白井成允先生は次ぎのようにお話し下さつた。毎年一道会に会わせて頂きますが、一年の私の生活の中で有難い御縁でありそれを深く思うことである。

一道会は池山先生のお念仏の徳を慕つて集る会合で、私など直接にお目にかゝりえなかつた者も、遺弟の念力によつてあわせて頂き有難いことである。池山先生のごことは近角先生から親しくお噂を承つておつたので、一道会が近くにつれてまた近角先生を憶いだすことでもあります。私にはそういう日が今日であります。青年時代から仏法を聞き始めて既に半世期すぎるが、一昨年あたりから、聖人が御本典の教の巻に「真実の教とは大無量壽經これなり」と仰せられて其他の經典を挙げられない、行巻以後の巻には沢山他の大乘經典があげられているが、教の巻に**真実の教**としては大無量壽經一つをあげ、この一經に生命の根本問題

ります。真実の境から迷いの境を見られて、迷いの境の人を証りの境に入らせずにはいられない如来の**真実**が南無阿弥陀仏の名号となつて下さる、その**誰か**大經で説かれてゐる。それを聖人は「**真実の教**とは大無量壽經これなり」と御本典最初に言われたのであります。真実が迷いの境に融け込んで下さる。まことの法が凡夫の迷いの者、煩惱に明け暮れる者にとけ込んで下さる。働きかけ、**真実**ならしめて下さる。迷いを悟らしめる働きをねんごろにお説き下さる。法蔵菩薩の発願修行によつて名号一つに成就して下さる。聖人が特に大無量壽經一つを、諸々の大乘經典の中から選び出された御心は、此処にあつたと思わしめられるのであります。

歎異抄に「親鸞におきては、たゞ念仏して」と仰せられ「しかるに、仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」と仰せられる聖人の御心には、仏の御**真実**が凝り固まつた結晶がお念仏である名号一つであるという大無量壽經**真実の教**の消息が伺われ、それを明らかにして下さつたと承るのであります。これで仏の**真実**を我等が頂くことができるようになったのであつて、こゝに有難い御思召しがあると思われる。一昨年あたりからそのようにだんだんわからせて頂いたようであります。

もろ／＼の經典に等しく感じられることは、仏が胸一杯

我等衆生を憐んで一人子と感じていられる境界をお説きになつていられる。この憐れまれている我等凡夫の日常生活は、道徳で規定されている、つまり我等は善悪の世界に生きていて、聖人は聖徳太子の教えによつて、「善悪淨穢もなかりけり」とお告げになつていられるが、この我等の日常生活、道徳で規定される善悪は、我れなる私より出発しているようである、我れは善し汝は悪しが出発である、これが宗教にも入つて我れは神の使いなり、汝は悪魔の使いである、というとき、人間の心からこれが出発しがちである。これはまぬがれ難いことではありますが、大乘の仏の心は善悪淨穢もなかりけりの御心のようによりに我執を空し善悪を空する。善悪淨穢と思ふことは虚偽であり、世間皆虚偽であるが三界の一子地の衆生はそれを知り得ない、その虚偽とも空とも知らない衆生に、それを知らしめ、善には善で迷い悪には悪で迷っているその我れを空せしめることによつて、証りの境界、和らぎの境界へもちきたさなければならぬとの御心が南無阿弥陀仏の名号となつて傳へて下さる、其の名号に遭い得たことが幸いであります、南無阿弥陀仏の御働きかけによつて解脱の境に導き入らしめて頂く、私等には思いもよらぬことであります。

私は鈍感で、いつも一道会で浄住寺様の歎異抄をきくが、あのように全身の感覚に念仏がとけこむことはできない。

こういふ風に歎異抄を読むお方もある、これは尊いことであるが私は鈍感でそうはなり得ない。そういうようになりたい妄想を起こすこともあるが、踊躍調喜することのできない私ごとき者も善悪淨穢もなかりけりの御心によつて救われることであります。——これで私のお話は終わらせて頂きます。これから池山先生の御教えを受けられた皆様のお話を御聞かせ頂きます。

次に池山寿夫様のお話の概要を誌すと次のようでありました。

私、池山栄吉の長男、寿夫であります。昨年初めてこの一道会の仲間入りをさせて頂き今年で二度目であります。

私は始中終、父と一緒に暮らしているような気が致します。何か毎日一瞬、父の影がうつらないことはない生活をしており、嬉しいことと思つております、こうして一道会に参り父を囲んで下さった皆さんとあうことは何とも云えぬものがあります。

父の晩年の十年間、昭和十年の後半を除いては、父を離れていた。年を経るに従い、三人の子供が大きくなるにつれて、その時分の父の苦しさの片端を偲ぶのであります。

私の父には三人の男の子がいました、一番下の子、幸吉は高校一年生の時にうしない、長男の私は外国へ飛び出

す、中の子は高校三年のとき思想問題で囹圄の人となる、只一人残されたのが池山栄吉、父であります。随分苦しかつたことと思ひます。その只一人取り残された苦悩の父を取りまいて下さつたのが皆さんであります。皆様は父に導いて頂いたと言われますが、然し父が救われ私達が救われたのです。その皆様の姿を通して人生を受けとる力を、父は与えられたのです。そしてそれが一層阿弥陀仏にひきよせられたと思ひます。私には何ともいへぬ感懐であります。父の信仰は学者としての信仰ではなく、生活の中から生れた信仰でありました、父は江戸ッ子で、庶民的であつてジャン／＼と半鐘が鳴ると飛び出して火事場にゆく、芝居、講談、落語が好きで、庶民的な味をもつた男でありました。昭和十年の後半、半年間私は日本に帰つていました、父との対面も八年振りです。父の家に蓄音器があつたので歌謡曲などのレコード十枚ほど買つてきて掛け父と一緒に聞きました。父は御存知のように、あの手を振つて、聞いている。そして、どんな歌謡曲をかけても、お慈悲にひつつけて解釈して話してくれる。私は父に「それは曲解ですね」と申します、父は「成程、曲解かね」という。

あの船頭小郎「ひとりなりやこそ枕もぬれる せめてみせたやわが夢を」。聞いている父は「これはお念仏だね」という。また十三夜という唄、

河岸の柳のゆきずりに ふと見合せる顔と顔

立ち降り 恥ずかしいやら嬉しやら

淡い月夜の十三夜

これをきくと乍ら一そうだね、親として、立ち降り、父と子と、心と心が通い、フト見合おせる顔と顔だね、けれど十三夜の月が無けりや見えないね、恥ずかしいやら嬉しいやら、は、お月様に対して、お念仏だね、お慈悲に對してだね」と、こういう工合なんです。

父は船頭小唄を、家の国歌だねというのです。

それでは第二国歌は、何ですか、というとき、父は即座に「第二国歌は、並木の雨だよ」と云うのです。

並木の道に雨がふる

どこの人やら 傘さして

帰る姿の なつかしや。

並木の道は遠い道

いつか別れた あの人

帰ってくる日は いつでもある。

この第二国歌の、所謂、曲解は聞いて居ないのです。然し父の心の底では「こんどお前と会うのは、別の所でね」ということであつたのでしよう、もう、此世では二度と父と子が相遭うことはむつかしい、その父であつたと思ひます。

世界大戦となり、終戦となり、私は交換船で帰つてくる。そうして夫婦二人で子供を育てる。子供が大きくなる。夫婦いま年老い、また二人だけに帰る。父の心が今わかる気が致します。「並木の道は遠い道いつか別れたあの人の帰ってくる日はいつであろう」。病身となり孤りぼつちの父は、何時、寿夫は帰つてくるだろう、二男の敏郎も何時帰つてくるだろう、亡くなつた幸吉にもじき会えるかな、人懐かしさに溢れている父。たゞ、会いたい、会いたいで、一杯の父。別れるのが厭だ厭だと思つている人間、孤りの人間、としての父。会いたい会いたい父。なつかしきでいつばいの父。——これがあの即座に父の口から「第二国歌は、並木の雨だね」の出る所以だと思ひ合はされる今日であります。

昨年もお礼を申上げましたが、今年も皆さんに厚く／＼お礼を申上げます。有難うございました。

右が寿夫様のお話の大意ですが、仲々そのまゝの空気を伝えることができません。特に第二国歌「並木の雨」のところは、参会の方々のあの時の思いを引き出す緒口いとぐちにしかありません。慈光誌友の皆様には、先生と寿夫様との父と子とに流れているお念仏の光り、先生の内側、生死の苦海にくつきりと映え浮ぶお念仏の月影を感得して頂きたいと念じます。 〓

二十九才か三十才の頃であります。お訪ねしたわけは、自分の精神生活が自分にとつて何とかせねばならなかつたからです。

年末に年始状を認めて先生に出すのに歌を書き添えた。

雲きりのゆきかう間なき心ぞと

しりはそめてき御名を唱えて
—— はじめて少しは私というものがわかるようになりました、仏の御名を唱えつゝ、そう思うようになりました—— という意味です。

所が、意外にも先生から御返信を頂いたのです。一月五日に信の友達の間があるのでいらつしやいというのです。

私はその夜初めて先生のお宅へ参つた。その夜は、私の生涯を決定することとなつたようであります。その夜の蓮華谷の先生のお宅を支配しておつた念仏の空気と声とが私を決定させたのです。帰つてきてから妻に、私はお浄土へゆくのだ、その世界を解釈してではなく、美的対象としてでもない、たゞ今夜、念仏してお浄土へゆくこうという生活をして居られるお方を目の当に見た、その人を信ずるゆゑに自分もその決心をした。君もゆくか、どうか、しかしこれは各自の決意によることであるが、と妻に申し渡したのです。——これは常識から言えば狂気の沙汰としかきこえないが、そういう言葉を、私に吐かせせるのがあつたからで

花田先生が続いてお話がありました。これは十二月号の慈光に、聖人に導かれて、という題で発表されました。はぶかせて頂きます。

次ぎに信国先生が静かに次ぎのようにお話でありました。

私は昭和四年に東京大学を卒業して四月に大谷大学の教授を仰せつかつたのでありますが、その同じ時に池山栄吉先生は甲南高等学校から同じ大谷大学の教授に赴任されたのであります。

その頃私はどうして先生を存じあげたのか、或は書物からであつたか、はつきりした記憶はありませんが、とに角先生を知つて居つたのです。それで池山先生と同時に大谷へ入ることは、どういふものか大変嬉しかつたのです。忘れもしません新任教授の歓迎会が洛北の山端の平八茶屋で開かれてその末席をけがした私はそこで初めて池山栄吉先生に拝顔したのでした。私は、池山先生の一拳手一投足に始終眼を集中していました、なぜか知らんが自然に関心を抱かせられました。

所が、それならすぐ先生の所へ馳せ参じたか近づいたかといへば、そうではなかつたのであります。先生を御訪ねするようになったのはそれから数年先きのことです。私が

す。

これがきつかけになつて私は先生をしばしばお訪ねすることになつた。こうした数年間の後、先生は昭和十二年三月に御健康のことなどがあつて大谷大学を退かれた、私は池山先生の居られない谷大は主人の無い家と同様であり、これも一つの原因で私も谷大をやめて、大分の郷里に帰り、今から五年前まで自坊のお世話をして過ごしていた。

既に京都へ参つてから五年になるが、故郷を去つて京都へ参つたその秋にこの一道会へ参つたのです、その後毎年土・日曜日の仕事の為に駄目となり一道会に参会出来なかつたが今年には幸いに出席できたのであります。

先程、先生の御令息のお話で思出すことを一つ申上げます。

昭和十年の夏でしたか寿夫さんは米国から帰られ翌年二月再び帰米されたが、そのお帰りの夜に私はお邪魔して居りました。御子息寿夫様の御出発の時と、そのあとの先生のことを、今日こちらへ参るバスの中で不図思い浮べていました。先生には何というか、一つの「定」じやうに入られる、一つのことと思いを集中される、というようなことが見受けられました。——つまり、その対象となるものと一つになる、併もその集中した事柄をピタリと表現される、表現する言葉がある。私共の真似のできない所があられまし

た。御令息が蓮華谷を出発されるときの先生の言葉、それはまことに簡単で送り出されました。「あゝいつてらつしやい」と。その簡単さに驚きました。その夜はこゝにいられる川畑兄・東兄もいられました。先生は別に悲しい姿も見せられないにも拘らず、そのあと「定」に入られる。その「定」と申すのは、出発した御令息のあとをジツと追うておられる、思いをもつて追ひかけておられる姿。

やがて先生は「今頃は逢坂山のトンネルを通っているんだらうな」。実はこの先生の御言葉で先生はじつと凝らして居られたことを知つたのであります。

その晩の御部屋には吾々仲間では今は有名になつております「紅梅を見せで別るゝ恨かな」の一句が額に納めかゝげられていたことをまざまざと思い出します。(未完)

法信抄

福田 鉄雄

謹啓。……病氣御見舞状賜り厚く御礼申し上げます。早速近況申上げるべきでございましたのに、風邪、引き続き心臓の調子が悪く病床に居り、御無礼申上げました。

その節日記の一部でも抄録して送るようにとのことでございますが、私の日記は心象の記録など一行も見出せませんでした、深山幽谷に迷いこんだ情ないことでありました。又日曜毎に求道会館に出かけましてお話を承わり、先生のお声はなお耳の底にとどまり、御姿はいまだにありありと目に浮びます。御恩はどうしても忘れられません。……。

大学を出まして大坂の製薬会社に七年勤めましたが、昭和二年に肺疾、数年療養しまして昭和五年に郷里盛岡に帰り、岩手医専に開職を得て生活して居りましたが、戦中戦后にかけて無理が続き、二十二年に再発しまして、以来十六年間病床に居ります。幾度も生死の境をさまよいましたが、周囲の無価の看病、誠意ある主治医の治療、結核の特効薬の出現のおかげであります。

しかしそれ許りではありません。福島先生からは何時もお見舞とはげましを頂きました御恩は到底筆舌につくせません。仙台で初めてお教を頂く身となりましてから今日まで約五十年、その間に賜りました御著書とその他の御本は五十冊に近く、富士をお詠みになつたお歌五十九首を奉書に認めてお送り下さいました。特に感激にたえなかつたのは恵空講師が叔父君のために書かれた「安心消息」という御文を六枚の罫紙に階書でお写しになつてお送り下さつたことであります。御多忙な先生に私如き者のためにこのような御苦勞をおかけして申訳なく、どこまでも深いお慈心にはただ感泣の外ございませんでした。それは二十八年七月十五日、私のためにお写し下さいました歎異抄の、「弥陀の五却恩惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」というお言葉と思ひ合わせまして感激無量でございました。

御見舞、お慰問、お激励のお手紙にいたりましては数限りあり

今更ながら自分の無思想にあきれております。全く醉生夢死の勿体ないお恥ずかしい毎日であります。……

私事、恐縮であります。自己紹介を致します。

明治二十九年に盛岡市近在に生れ中学時代から、盛岡で育ちまして、白井成允先生の御令弟、武氏と全級でした。

仙台の第二高等学校に入学して道交寮という仏教をもつて日常生活のよりどころという趣旨で出来ました寄宿舎に入るようになりました。それは大正四年で、寮は東本願寺の仙台別院の境内にありました。

近角先生を年に数回寮にお迎えして御講話を拝聴し、随分熱心にお話を承つたつもりでございますが、二年間迷つたまま暮しました。福島先生の御指導をうけるようになりましたのもこの仙台時代からであります。

夏季休暇には、盛岡の願教寺で島地大等先生や白井成允先生によつて講習会も催され、何時も聴聞いたしました。この外に南条文雄、赤松蓮城、多田鼎、前田慧雲先生などの教に接しましたが、性魯鈍で、御仏のおまことの一かけらも頂かず終いでございました。

東大の医学部薬学科に入学し、丁度その頃東大仏青の結成の時でありましたので私も末席に連り、上野の寛永寺坂の福寿院に仏青の寄宿舎が出来、七人ばかりで結成いたしました。名古屋の御出身の英文学の本多顕彰氏も同宿でありました。当時仏教界の最高権威者の村上專精、高橋順次郎、沢柳政太郎、矢吹慶輝、渡辺海旭先生方にお世話頂きました。然し悟の頂上には到達出来ず、

ません。福島先生のお導きお育てにより何時の間にかお念仏が称えられるようになりました。先生にお報謝が何一つ出来ませず、ただお念仏の外ありません。半世紀に近い間、親兄弟とはまた別な深い御恩をくり返えし味わつて居ります。「よき人の仰せ」という歎異抄のお言葉は私には近角先生と福島先生に極わまつて居ります。

私の病も一昨年あたり結核の方は一応終息させることが出来ましたが、後遺症として心臓機能不全という新事に悩むことになりました。……殊に本年八月以来約二ヶ月、殆んど連日発作、今限りでこの世ともお別れかと幾度も想いました。この際一番気がかりになりましたことは、今迄言葉につくせぬ御恩を蒙つた方々に何の御恩報じも出来なかつたこと、それどころか「有り難うございました」とお礼の一言も申さずお別れすることでございます。この心臓の調子では何時麻痺におそわれるかわかりませんが、以来私の身体の調子や体力の状態をよく見まして、かねてから御世話頂いている方々にお礼申上げたらこれがお別れの手紙となりましようと思ひ出来るだけ毎日一本宛認めて居ります。先ず福島先生に御挨拶申し上げましたが、書き始めますと御厚誼を賜つた方々は無数に思ひ出されて、こんなことを何時ま続けられましか怪しくなりました。……

草々



あとがき

節分もすぎましたが余寒の去り難いこと
であります。さて、節分とは、冬と春との
季節を分けることで、昔から、「福は内、
鬼は外」のかけ声で、豆撒きの行事が年々
行われて来ました。

私も永い間、ただ、豆をまいて鬼を払
い、やく払いすること位に考えていました
が、起源はそうでないようであります。民
俗学者によると、古代の日本では「オニ」
とは祖先の霊で、その祖霊が節分に家に帰
り、家の者はその秋に収穫した米や豆など
の五穀で大歓迎し、祖霊はまた子孫に祝福
と繁栄とを与えるというお祭りでありまし
た。

「たたる」とは「立ち現れる」ことで、祖
霊の鬼が立ち現れることであつたのに、そ
れに恐怖心が結びついて、凶事をもたらす
という意味になり、祖霊の鬼も悪役にされ
て初めは歓迎迎えたのに、追い払われる破
目になりました。

こうした民俗的行事に支那の陰陽道の影
響があつて、鬼は東北(うしろ)の方角
に住むと伝えられ、今でもその方角を鬼門
という人もあります。そして牛の角虎の皮
を身につけた鬼とも伝えられます。

さて「今を昔にかえすすべなし」とは申
しながら、古代のような祖霊を迎えて五穀
を捧げ、子孫と共にやわらぎむつぶという
節分会にかえしたいものであります。人間
のもつ恐怖心が迷信を産み、二転、三転し
て、本来の明朗さを失うことはありがちな
ことで、その正体を見極め、幽霊の恐怖か
ら解放した生活が願われてなりません。

近角先生の信楽釈をこれで終り、次に欲
生釈を頂くことになりました。聖人が信心
為本の宗風を高く揚げて下さつた根本、眼
目とも申すべきものが、至心、信楽、欲生
の三信であります。よくよく御身読下さい
ますように。

「病青年と語る」の佐藤強三郎様の原稿は
ずつと前に書いていられたものを、補正し
てくたさつて、今回頂きました。
「一道会の記」はあちこちから御催促をう
けて居りましたがお待ち申わけあり
ませんでした。御参会頂けかつた方々も、
この記事をおして御しのび下さいませ。
福田鉄雄様の法信抄は、御難病中、一日
一刻をお大切に念仏裡に送り迎えてられ
襟を正さしめられました。

春曉の山を動かす魚板かな

浪藏氏詠

御案内

毎月地一、二、三日曜、午後一時半、
一道会館。真宗講座。市電、新郊通一丁目
下車東へ一丁半。
毎月廿四日午前、午後、昭和区小桜町教
西寺、法話会、市電、御器所通り下車、桜
花学園東側。

定価	一部	二十五円(送共)
	半年	百五十円(送共)
	一年	三百円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷人	本田 政雄	
発行所	名古屋市南区駈上町二ノ八八	
	名古屋市千種区千種町馬走二八	
	名古屋市南区駈上町二ノ八八	
発行者	慈光社	
	振替口座名古屋二〇四七〇番	